



^ 5
6633





Faint vertical text in seal script, mostly illegible due to fading and bleed-through from the reverse side. The text is contained within a rectangular border.

八五
6633

<2002-22>

猿蓑

言其角序

非活の葉つくはゆす古今よりうつく山通れりて起座
き時りしや幻術のまじりしもの白く魂の入りぬくゆえ
よゆめもに似てゝあし久しく世とてまらき人よ
うつろく不変の姿をとらるゝにみ徳のつたふ及んば
くはれつゝもくちり彼西に上人の骨をそく人と
ゆゝくく輝いし鏡にう南よまきまはるゝとてこれ
る人よみぬくゆゆもその智のまはるゝならん反魂乃
法れもろろくよゆまをされをたよりぬれ入きくそア
ウエラよくゆきくいうれん吟輝も出ぬへり只
淵澄る魂の入りし存まきそくして我れは脚のりゆ

伊弉戔一々山中うく猿蓑小蓑とまらきく非活は神
と入しまひひくくならまら断腸のむかひの母ひをすあは
懼るゝま幻術ありくゆとえとて山集まつりて猿
まのゝいむむやれをるまの序かたれんまの魂と合
まぐままね北乃ほりりまのまはまをくま

又

初一々水猿蓑小蓑とほりけ也 芭蕉
あはしすけやゆめあるぬの清き智 其角
時雨まやまひのゝく動ふは 千册
笑人、一々水みわく智田丸 夫丹
非活の猿蓑つりて一々世也 正秀

廣江やひしりけりぬき活ちり
舟人よめりきりきりし時ふれ
尚由

伊賀の境よき

はらりしやきりんの境の一時
時ふりや思まつしをの空あり
るりりて行田の里やゆりし水
るまき水し星れ光や小夜しる
初田と押懸けりし水舟
いそしせ沖の時雨のま帆片物
るりきりし北4の星の初
一りりし動くあふまき水
舟水

舟 二

ちりりしよ何とねるるよの中
帰花をりしよもえりん花切し
禪まの妻の姿をや神を月
而舌をたわむ世中の杭よ十月
このよしや船腹痛む人の影
砂よりや思ひたりのあまよ
ちりりし
棹床のよきりりゆり姑舟り
段折やなふりり通れり夜り
らやのよれもほりり人らよ
このよしは茶の花ゆりり
古寺のよきりりし

其角
曰
凡兆
光景
芭蕉
凡兆
伊賀
土ま
道
越人
猿
凡兆

箱の堅田のまをくま

熟水の引くころあしひまこころ

其角 車舟

草津

神速水口きくら、了は 鈴

尚白 珠碩

雲月抄良

寝まうりおよおかー 柏

伊豆 良品

あを月の水何種もやあ仙花

不玉 圓葉

くハ世はまのむくーまやあの輝

玉舟 櫻丸

丹 三

しらきいよも咲のる井のまき

尚白

茶湯とくつうとさくも秋をた

江戸 巻箱

炭箒よ手夏の猪のほまじり

凡兆

住つぬ孫のあうやま火壇

芭蕉

寝ころやくら蒲団のまあめ

其角

門前の小窓もあうぬみまを

凡兆

あをやあひ切うまをた

凡兆

うつくハ眠るふはさくれり

凡兆

貧乏

まーりい紙子の切を譲り

美州

浦風や巴風らつんむ

五五

あし後やまや訓さる友

五五

弱法師家門ゆきを餅のれ 其角
 年の夜やそら従えて受けふと 其和
 うす聖の一きふ何々やーの如 其来
 年しりし年のまじけや伴聖の 日
 大とーやまのまじけらんこころ 相紅
 やうく心く又やまじけう年の者 其角
 心くくとらん心く年の者 其通
 年のく心くまじけ年の者 其角

夏

有明の面おこりせほくきん 其角
 夏うすし聖よりけ末やけらる 其角

世と携よりむけよほくきん 芭蕉
 時とくしよのまじけけらる 尚白
 月とくまの何とまじけ門の梅 北
 山とくまの何とまじけ門の時 其角
 蜀魂なくやまのられ用 史邦
 入相のひまのれ中やほくきん 相紅
 ほくきん何とまじけのやら 其来
 んあふ代も及やほくきん 其角
 こひ死ら我懐くあけやま 其角
 松崎一見のけりまじけや持の毛らと
 ようらまじけ
 春と高や持まじけらる 其角

うきあといふりしつてよのんを 芭蕉

旅館をせむく在州とんを 狂歌 曲水

若親業いらい成し一りりり 曲水

四月八日諸尊母墓

花水りううしり了らあり弁 甚角

さふらぬ花財牡丹の姿あり 全奉

別僧

りりりれんやとと上 赤雲花 越人

知るものさし人からんてけし花 疎硬

あふれらぬすまあしりりりり

似合しきけしの一まやんたの甲 杜園

まらさき白もゆしけし花 花業

井乃すきし流し流し杜善 半強

起物とあまきりぬ糸のるれ

起くのんうくしりりりり 仙化

題去身し嵯峨落橋舎 二方

豆柿を畑し本命をし名あり 凡北

破道やりりし命子乃のひる 若衣

南都旅店

誰のりくちりわぬ乃園乃相 千那

洗済やまめいよとて近柿の花 若芝

豊国うき

竹の子乃カと流し多しよふ 凡北

ふけの子や畠隈よ悪をるれ 去身

たけの子や執事時乃侍のまゝ
花よりかゝるさうとありし
正秀

明石夜泊

蜻蛉やうらぬまをまるとはれ有
君代やいほ摩宗も端一ツ
越人

五月二十日ふしきしる家より

石の草とまきくさけり若蒲川
其角

粉結ふりし子よる心願むを
草意

隈は深乃度葉しるし餅粉
岩翁

ふししる客人やふまゝりし
尚白

五月十六日坂うち死の遠忌を吊りて

大坂やふのよの夏のふし年
伊賀 焯吟

奥羽さ館ふり

夏草や兵六、ゆゑの泣
芭蕉

這出上つひるを、下は蜻蛉の勢
同

い境をいさるるくさくさのまを
同

かいつかり角よりけし次は明石
同

女房雨子家より押さるるを
北

ひねまの味はまややま月而
本意

了上乃謂次方よりさるるを
史邦

奥州名九の郡に入る中松原の塚に

いつくさや、終始ぬるなり一里半

さうりたりのるは高しりまゝと

おゆかりつきたるは内角より

かくおこし

いさよ山やいつこ五月廿日夕道 芭蕉

大和伊予のさかひもてう一坂きけむ
の順礼とてあてはまかすくわんれ科足
の紙のうに書つけゆる

五月廿日夕雨 五来

翌朝や一夜今寝て六月雨 九北

日のみや葉傾く六月雨 芭蕉

池あやももく六月雨 羽江

七十余の老醫みまうらるるよかる大
こころてけくまき手にいひみの白とけ
その老醫いまたる一時的にまをる

人よあつさうれいさかきけふのうらみ

古まよれから年まきといへくわく

ゆらゆら

六尺も力落しや五月あはん 其角

百軒も麦よえつく茶摘 五来

あうまや茶山より上ぬれ 西秀

つらみ合子れけしけや麦 鬼 遊下 遊力

孫や中し 芭蕉

麦世余の家しやらん 雨 燈 智月

麦出あく鯉近みふ山家式 江 花紅

川川乃園こく 芭蕉

気流のそくもや風をけ負徳 芭蕉

出羽のつれよ

肩塚と面影うしし紅杯乃花 全

は種了等情申す併のち子と相り

所袂のころしふつり 紅杯の花 千井

田の取乃を流し山り 常々那 石平

後不曲水之結つり

常火や 常々乃や 常々

切田常々人二句

やみの花や子ハ後出り 常々那 凡北

けしころや 紅杯乃や 常々那 巨意

之然れハ流るる村

常火や 常々乃や 常々那 田上尾

あつらふに物しきりらぬのり 尚白

草のや石合中しくこれの鳥 半残

病後

やうつらもつしらわつくる合の花 土坂 何処

才風やあまを先する合の花 三良

精虫癖を仰りて

子やちろん其子の母も此の吟ん 花葉

錢別

まはるやあまをさうりぬ花の名 性山 里東

うしき人よつり

あまらるはきまこれのり

みー、夜はき流る冠をよき藤川 三角

唇も事なく思ふ乃もさし
月鉾や思乃額乃 浮橋
夕々山や岷並ひしる宇乃峰
き乃もの今乃ハ比唇 似る
千那
名良
吉山

楸丸や蓮さちるも 行一ツ
母句を成よりきこ仰り 妻堂
おれ 後人

かつらりしとめけ初ら遠や松乃風
芭蕉もあそびふる山や松の風
人子似く松乃も山 松乃乃を
路通
松石
如松乃乃全昌寺の宿す

終水秋風まじくや 雲の山
早ノ赤や踏まれ 霞の赤と松乃
あささ赤や 踏射全留れ 松乃風
まの 赤や 松乃 山 芝の 起る
大比敷やまの 舟 葦の 赤あけし
之とまらりし 乃の 山 赤や 松の 苗
文乃や 山 乃 乃 夜 乃 似る
合松乃 山 乃 乃 乃 乃 乃 乃
さすや 赤 乃 乃 乃 乃 乃 乃
くや 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
朝乃乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
葦乃や 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

山川
九兆
世を
元兆
芭蕉
全
伊予
村若
及肩

海士のをハ小海老よりけりハ全

かき乃小ねとこま多田乃神往乃

室也とくくゆふ海と菊うも多れ

ふく日く流乃まれをきまき

はくまのあらり情子抄あま

むじんやふ甲乃乃れまきく

葉島や二葉乃中乃まはる

そく井りや聖ふあく唱夜月

いせふまうてくく時

葉乃也まはる海の人とあん

とナ月小養乃あひ目とかくり

雲輝と月抄公あくるぬら月よ

全

尚白

尚白

尚白

尚白

尚白

尚白

尚白

尚白

尚白

尚白

尚白

十四

月又七人仿るれははれ抄新 去来

一 翁と芽舎ふら

ねとくうくねいまかえよ乃月水

のなと流 去る流乃

やうく井神はまきまき

乃新や指さりて膝 文解

万世乃と條をかうわい

新のりり乃あまを送る新月水 伊賀

もを松葉ふやあてり乃この教 了心

よるの海系をよれ乃あは信中 文解

吟風乃あまやえよる一乃 凡此

好くくくくくくくくくくくく 尚白

向のけきるも月るるむらりぬ 首長

え福二年つる舟渡り月とく

と乳母の明神と治世の上人のあはれと

月法 北川のあはれ河乃上 岩意

仲秋のしげきと後を并し

うらぬの月らんりりやまき送 昌月

明月やまはまれ茶乃由 羽江

有るふく人のあはれりり 尚白

信のあはれりり少をれあはれ 尚白

初流平 雪門乃あはれ花柳母 此北

一戸やあはれりりりりりり 此北

押の地乃る遠りりりりりり 此人

廿十五

は糟やかたしもあはれりりりり 正秀

あはれりりりりりりりりりり 此北

一を不考山文街

物乃るあはれりりりりりりり 凡那

ひつりりりりりりりりりりり 首長

松林庵乃つき合軒 下 千里

替りりりりりりりりりりり 此北

上りりりりりりりりりりり 凡那

鱈乃りりりりりりりりりり 半我

わらり同のりりりりりりりり 尚白

茶と切りりりりりりりりりり 身角

るるるに 藤のりりりりりりりり 此北

7

このは乃おちるく代 編む秋 土音
編つづく母よ出逢てくわあう邦 凡北

自題 落柿舎

枿のしや枿をちるきあはし山 土音外
あはし信やゆりく枿乃下らるる 土音外
那をそくし竹田山枿をちり紅葉 凡北

仲田宗

子あはしこころの枿をちあはし

仲田宗乃較く何ま 故是

拙子あはしあはしあはし

花すきき大なるんとまうりく枿 凡北
巧秋乃ア身。弱ゆるまきり 土音

まゆの秋の夕や風あはし 凡北
世の中ら鶯鶯れ屋のいあはし 全
落魚乃 遠くももくもや枿の音 土音

春

枿あてくらの枿の枿もあはし 露沾

上落乃山枿牛まきくくもま候し

枿く香や山路枿入大のまの 去来

むけんう香にま入甲の牛一の角 句空

庭奥

枿く香や砂利しき流る谷奥 土音
まの枿を骨あまきまう枿の音 半夜
枿く香や沼のころひ枿あはし 土音

正久のちやけいし節と露のしづ
其角

あはれ彼の後や梅をよしとて

法師は子れ一とて梅一梅は香
芭蕉

渡菰やゆりたつれの朝の夢
千那

仄控とく白雲うらむ垣根入れ
元兆

日常あはれまぬまゝもや扇半房
支那

暗香浮動月若成

入相乃梅まぢりけいさく風
風麦

武江にみまむく松亭の残香

寝くくしき念の細目や園の梅
乙州

幸未のしづはさのしづはつるしづは

山より山く梅のあはれはつるしづは

うたて四友嵐客さくらむらさきのちや

白ひと幸ぬらとらふちと思ははあま

ゆのうらぬあひゆきとちやあま

下感動オオとらとらとらとらとらとら

とらとらとらとらとらとらとらとらとら

とらとらとらとらとらとらとらとらとら

風物とあまらふ

夢さくらとく又白ひさくられちや
卷草

石八のよひて梅はや園は心ち
耳角

ゆりゆり寝し能宿とく初子日
さき

舟島や扇遊のけく摘む葉
史邦

くらりちやとらとらとらとらとらとら
嵐草

身乃月西ふつふ乃す中じ 如の

懐箱之字中

裾折く葉波つこゆるん草休
つこゆるん器身ひききさふ
大穂や波うらまおしん
あまのや歌乃のわー根芽ハ
うまじやのつこゆるん草の葉
賦とハ草乃つこゆるん月夜ハ
鈴こゆるんあふくあふハ
草れ草踏ふあつ穂
草やとや一草乃とあつらふ
うらむしやとささふれハ

廿八

草や下結の歯平つく小田の如
草やとや一草乃とあつらふ
あつらふ乃とささふれハ
鈴こゆるんあふくあふハ
草れ草踏ふあつ穂
草やとや一草乃とあつらふ
うらむしやとささふれハ

几那 魚目 撰丸 下宅 遠水 尚白 一嘆 日 揚子 越人 甚甚

さあやうのまゝに猫のてふまゝ

露沾らるる除きく乃若く

まき風よめきもさうさうのねん

そのまぬれちりしぬさうさうのねん

出ろくやせむさうさうのねん

せうさうやせむさうさうのねん

骨まぬれかきさうさうのねん

白魚や海苔の下ぬのい合せ

人のまよふさうさうのねん

まき雨さうさうのねん

陽さうさうのねん

かき雨さうさうのねん

うま

海苔

海苔

海苔

海苔

海苔

海苔

海苔

海苔

海苔

海苔

十九

さうさうのまゝに猫のてふまゝ

さうさうのまゝに猫のてふまゝ

さうさうのまゝに猫のてふまゝ

さうさうのまゝに猫のてふまゝ

さうさうのまゝに猫のてふまゝ

さうさうのまゝに猫のてふまゝ

さうさうのまゝに猫のてふまゝ

さうさうのまゝに猫のてふまゝ

さうさうのまゝに猫のてふまゝ

さうさうのまゝに猫のてふまゝ

さうさうのまゝに猫のてふまゝ

さうさうのまゝに猫のてふまゝ

土芥

氷園

凡光

芭蕉

死力

嵐を

岩通

水

凡光

海苔

虎

東の雨や山よりおぼやしの門
 石舟やのき起す水一帯の雨
 草の雨や田舎のしよれぬき
 さら雨のあふやれふなくつれ
 流るるや苗代らの野一し
 故しうらふあまのけやせのま
 揺るや下をよけよるまの織
 まる風やこころを離のまの
 柳柳くうりうらやをんるの
 きのふはかえりあふりわが
 里人の膝をうらむ田舎の
 坪のあふく一夜夜ふりうる
 後執 芭蕉 史尹 由江 史弁 昌房 去年 藤子 羽仁 鳥巢 岩推 半政

廿二

氏をまじりて血を凝とけおふ
 いらのりりこころをすむや 濠
 田のあやこころの上れおれ
 さらぬくむまはきせや縁の夫
 周のあや葉のまよりくをく
 越よりおぼやけりよてさ乃
 のあやまきこころしほよら
 山崎やうらまの
 就きれまはれ樟の枯枝よ田のぬ
 うすしうらうらえらるるけうら
 子や侍ん餘り雪を待たるあり
 のくろくくの中れ拍子や拍子
 北 石白 松風 芭蕉

昔々其茶を六少りきこむ

蓬子少端洗し一あしやこれ

木瓜筋旅し一とんと世にあふ

畫讚

山吹やうの信乃焙好乃白少時

白玉れ病ききうく膝うれ

わうしうきくやまひうらあひ

あひうらだもあむつり山身

コトバうへく

井もくも昔やちうく枝

蝸牛赤うよせしるつて手うれ

うくのそれまゆし一とる枝うれ

曲水
山店

芭蕉
車乘

羽衣
松茂
芭蕉

廿
廿二

さうしうとまの進みまけいり

東瀛曲よあうの

少時きやまらからうく山吹れ

一枝り丹ぬもてり一山後

難めあまもまことゆるやまは九ん

まのまらり一枝命りしちの極

五つ内のもうくはほさく

あつ齊よまうまうくはほさく

葛根の少りこと

控んく一花もゆり神一

いらのまは花根のたはうのうく南ん
乃へ手極の料ふ附りせうと

伊賀
利名

昔南
高木

凡兆

文州

史部

千代

芭蕉

らん重水

一甲ふくはれ花をれ子孫や

同

亡父の墓を武谷中にきりけと日本

きて別せし年のはたの地よりぬ

暮のあま極極玉伝ふよしひひく

母の抱ふもつとてうの極とたて境

くうや他の墓を極極玉伝ふよしひひく

まうりや花吸ふ蜂の付還

園風

か人平あらししと花んくれ

去冬

あま依の嫌ひ花のあうれ

元北

信人のやうく

花を春の夜あらしう花靴

半強

廿二

解きしこれ花中のゆふ一叶

石扇

それと奥のやうのひひひひ

ちん軍やうけし奥のたの果

善長

る備山このあ

る備や花うの代とあれうを

光景

保氏小將とん

標干に夜し花れえす

羽衣

庚午の歳家と煙

煙よりりりりりりりりり

小枝

るれりりや花蓋の極

元北

海常あれりりりりりり

善長

大和川御の

草砂とくちなるはやちるは
 山をや跡踏ふけり尾のひき
 やうく一海千のふりやうの
 名角しく印花つらひはせり
 雲の影ききくちうら山雲が
 木さる
 ときまは石ころあふはる
 春乃あひく水う初瀬の堂を
 くら水惜ま
 けりまははをいの人と舟ころ
 孝の羽も制めさうしうれ
 世世
 此丸
 初月
 山川
 式々
 乙辰
 五五
 七七
 七七

一物まじりの木の葉まじりま
 隆川の船うらむ川こま
 ためまきをくくは隆徳乃ら
 まいりくまき遠くは者北月
 人まら水はま物のり 初春
 かまいたくまき総抄しく秋
 ときまはらうよまきくちう
 何れうらまきまの心まらう
 甲うんえ初しく年の果ふく
 ほうせしうま年の花はの
 美世谷めまのうらまき
 鳴り初は先田まはらうまき
 世世
 元北
 史邦
 莖
 来
 非
 非
 北
 北
 莖
 邦
 非
 莖

三甲のあまりのめろくえりふ
このまも盛岡の男居あうて
三一本のまじりる月乃新夜
苔ふくくろふまやうる水跡
めくろくろく一々おの腰さら
いしらときき午一二日のお七かきこいさ
まきけりりまじりるおれふのあ
火まのりしにそりいれいさまきけり
ほくくまははまははまはまはま
瘦骨のまじり起ある力れま
薩とくろくく車引くま
うまじり人を根殺はるうらまかん

邦 兆 邦 兆 邦 兆 邦 兆 邦 兆 邦 兆 邦 兆 邦 兆

いまや別の刀さし一に出さ
せりーワキ掃くうさくらら
おのひ切てる死くらひらんよ
まき天子き明月の影あけ
湖氷の社刀 はららの初ま
紫の戸や暮妻めらまきおと
めのこまおやふ凡のうらむれ
押合しし一寝くこまきつり掃
くくらのやうのまきこまき
一掃鞆つらと空つらむれ
杵和り 古まあまはも芥さへん

邦 兆 邦 兆 邦 兆 邦 兆 邦 兆 邦 兆 邦 兆 邦 兆

十五才 廿九 廿九 廿九 廿九 廿九 廿九 廿九 廿九 廿九

史邦九

市中小おのまほ公やまは月
 あらししと門く刀の
 一番仲一ちりも事人の穂之
 灰うらましくうさ一板
 け糸に流るんまし不向中ま
 乃とらアト一にそまは指
 草村中下越こころうまうれ
 藤の芽よりにり地中りり
 通心のむろろは花のつはむ
 能少の十序のちろは行りま

凡北

北 才 莖 北 乘 莖 北 才 莖 北

魚乃骨とあつる造乃老とん
 け人のひし小街門乃溢
 まろり序れと倒す女ふり
 湯あは行のまを子信一ま
 苗垂れ実と吹流は白山
 傍やまましくま千かつさの
 きたりの積し世と積ら秋の
 年よ一を乃地子らるし
 五六本けりまつけしは
 足代を少しそり人黒はこ
 追ふつて早土あてるの刀持
 了けちらるあよあにらり

名

北 才 莖 北 才 莖 北 才 莖 北

戸障子も四つ入りのものを
 せんきやうきまゆりにつらまつく
 こころくと草鞋ついでる月夜は
 登りしあらしひさびさ一和秋
 りのちねにういふる井原
 ゆうきと草鞋のらつめき一和
 草鞋よ智く活るふあやふり
 いのち装束は探葉乃さす
 さはゆいよ品うりういよあはして
 浮き果はひや小町一あり
 あにあらう病さるふり減ら
 街のあきとちりて度き板友

廿六
 北 斗 慈 北 年 慈 北 年 慈 北 年 慈

身のゆいん風遠にすら花のうけ
 かなしきこころあはさのゆいんさ
 元汁桶乃きりてしりりまりん
 あかしくかんりてしりり後まら秋
 新玉いまふりしりりりりりりり
 ろりりりりりりりりりりりりり
 子代孫くま物と極く子四り
 学乃者にたかしくもさしりりり
 うさしりりりりりりりりりりり
 麻と部うりりりりりりりりりり

元北
 廿六
 北 斗 慈 北 年 慈 北 年 慈 北 年 慈

冊一 正巻一 羽一
半張四

幻行蕃記

世世野

石山乃奥山をちれうしり山を四山と云うれ
必ふさ乃名と付ふあふし杜原ふゆき流石と後
アとて孝徳と及ぶとの三曲二百年にて情ま
せりし井村ハ江原のそ徳とや唯一の家と其
あつまるとあつた光のけ利益乃豊と同一
とれたあつ又き一四山と人の語りりりり神
さい物志つる侍年位きて一草此戸のよ
和世別とてとるゆかり聖徳と孤行すと

サ 三十一

とけり幻行蕃と云あつた信行のハ勇士菅
氏曲水とく伯父とあつたハ八斗
正一とあつたハ幻行と人の名とのとれと
予又市中とさるの十斗斗カ一二十年とあ
才ハ義兵れみのをまハ端牛家ハ朝一奥
ふ水深乃 聖徳と四斗一画とこ一とあ
くしと小海乃 聖徳と四斗一画とこ一とあ
湖水乃 聖徳と四斗一画とこ一とあ
一斗一乃 聖徳と四斗一画とこ一とあ
結露乃 聖徳と四斗一画とこ一とあ
やうて出ーと一斗一乃 聖徳と四斗一画とこ一とあ
まじくはつーと一斗一乃 聖徳と四斗一画とこ一とあ

ひとあつしめねきしーや風のふか
 月ゆるやあゆ風月ふくすくこ
 ちうの子に粟井もあつし正法ゆか
 清しきやとまにまふ正法、す
 話よるあつし
 掛たあつしとくくくもや煙のふ
 月乃下やとほふおふ山涼し
 文よるあつし
 後ふふあや早苗はけりふた座
 一袋こふやとつお田れこつま
 書音

一夏のつしとくくくもや煙のふか
 夕えや村ふの奥れ一まきり
 秋風や田と山乃くつあつし
 ちうあつしとくくくもや煙のふか
 本郷あつしとくくくもや煙のふか
 白紙と書
 結子とくくくもや煙のふか
 編のたつしとくくくもや煙のふか
 石山やあつしとくくくもや煙のふか
 桶の輪やあつしとくくくもや煙のふか
 書音

禪寺は一日あそふ物乃上
 柳の角乃そつぬ垂ら完
 淡出しの半に俵紙をこふや
 ぢりぬぬ板ふくく山内
 有はる侍やまふけうらうら
 蕨乃乃葉乃若葉ははゆ
 可水くくあそ葉も板もむくは
 体倍たうしるむくはわに
 融やうにまの板乃そふ風
 ちゆににまはくくわに
 川まきく可まきま葉まきま
 うつと火入よあつて
 蕨 蕨 蕨 蕨 蕨 蕨 蕨 蕨 蕨

花かそや折くぬまのむくわ
 流かしらのあふいりうよのあ
 里 蕨

雀の字や搦少く海さるの
 了り葉の岸のわかーあま月
 立山家や買くくそめれそ秋
 好川くくあふ城のそく甘酒
 葉まきくく葉まきくくみ
 遠とまきくくあ乃洗 是
 悔ーさきくくの一歩の足
 法杖まきんてまきくく
 馬 蕨 法圃 里圃 蕨 沽 里 蕨 沽

ようきいするまきのうら氣まつふー
 ありあつるまふ乃 客 里
 何事もあつてめつ言 駒 迎 沽
 風よるんわる子編の穂の月 里
 臺所秋の住居よ住へく 沽
 産良乃むまこ女房呼り 里
 咽るる伊勢の幸酒の年落り 沽
 善るるあつるれまぬ一往 里
 遠来もあつるくすまき花盛る 沽
 妻静あるゆ干乃 深 纏 里
 雪乃乃乃まふ江掃残一 里
 志あぬ合志くたあく飛 沽

毎くになをうらのまとお趣く 里
 之崎敷聖のふのうさむや 里
 汁の字まこまき花子乃出盛る 沽
 あつるまをよ何刈くとは 里
 にくに寺の指界と書ま一 里
 盾のおま乃あつる淋一は 沽
 浅るるあつるつぬ小商 里
 甲下しく底よよい料屋よ 沽
 肌入るる秋まあつるもの月 沽
 歌よこあつるま世乃ま海 里
 何んあつる実の母のあつる同 沽
 五けくつれおあ乃 一 里 沽

まのふれぬ帳子時乃あひぬ
すくくし氣味よき松苗水風
花れけり葉をまはつ子の舞
あつ田乃土のわくくみふ

里圃

みまこまき雪川すゆる嵐の車
みれおさた乃まおなうく
大根れくまぬおよしうけ
上下ともよね茶のむ秋
町切よ月又の路乃葉も鉄
あちくくと通ふる次

沽圃

馬菟

里

ゲ
四

智母心院のせりの雪極りく
あくく乃後き楓わやく
畑乃鯨よあとうけはく
目利く家きよれきく
状葉を後海の飛挿法とて
ちいせいのあつたうぬの
草れ葉ふらあとのあつちき
伊勢氣つよ綿とりの雨
さき後を懸しうねの海
まのうまふ明とる
葉舟乃花の中よりはの出て
柿の侍へ門とまきとる

菟

里

沽

菟

里

沽

菟

里

沽

大まかき清きらんよすゆる
盡おる花も鹿利よせり
腰けつこし一着棚乃下
考

春之部 花格

盛石乃あくるおすや
憂好をよ又さ中月
朝子似ぬやの句も物上初
あ、道はよ乃股らるる花の山
角つれ一人とがらや花の女
花散と竹える朝のやすは

其角

芭蕉

同本

天州

西堂

富貴ある酒をよあひひて文君
川若も酔乃よまれよあひひて

酒初をよあひひて文君
賭しして勝出されりさるる花
人乃氣もかく空規一さるる花
くりり日や時中乃花乃水面
七のりり花見よとて花中
見る所ありよ花やさるる花
咲花とひひりりり老木
系なやあふと人まぬる花
二の程やさるる花の鼻
筆裏虫は出方よあひひて

惟然

支考

佔使

猿維

湯和

乙州

木名

沾荷

子珊

卓盛

田字

蕩蕩乃名物也らんや肉様
咲かちも花や飯未み十一石
山門の花きののしー木のゆき
たうれ本乃根やあしりく花の
花のまとききく似合す人し
これやうにまふふと花のま
ぬりまの聖乃志うりく花の
一日と花人のあてやと形
ハま様、系よも福もまふ花

若菜

徳極や廿一、あし土はく

李里
桃首
一桐
如雪
其角
一崎
卓盛
沾圃
全
嵐本

角乃啼や心也乃若菜
夕波乃形まきこゆはつふ
一かぬ乃牡丹をまき若菜

株附柳

まきしや守まきののし
赤さくまふた思柳し
守極乃あしひま未り世
里坊の雄まきくやせ
投入や株のおもき
病傍のなまれ株のさか
あしりく花のまき
若菜や株の涼し下法

曲架
孤玉
屋辰
芭蕉
其角
昌房
良品
るん
万平
魚目

あつ梅やがらうか家もあつらり
千川
き寝不や梅のあついとあつては然ん
大舟

天神のやううと清て

あつ梅やがらうか家もあつらり
千川
き寝不や梅のあついとあつては然ん
大舟

あつ梅やがらうか家もあつらり
千川
き寝不や梅のあついとあつては然ん
大舟

あつ梅やがらうか家もあつらり
千川
き寝不や梅のあついとあつては然ん
大舟

附魚

あつ梅やがらうか家もあつらり
千川
き寝不や梅のあついとあつては然ん
大舟

あつ梅やがらうか家もあつらり
千川
き寝不や梅のあついとあつては然ん
大舟

鮎乃子乃んすは海一游の春 土芳
ゆけうふとすまあつく小鮎引 圃水
あゝ魚乃一叫しちりやゆあゝ 子珊
白魚乃ちうふまもは法はぬへー 山峰
汝川まあうあて
あゝ魚をさうひまゝにさう南 七南

オモヒ

なぐりつてもおぼろの世は海やまじま 正秀
名料やねまうけしは蚊乃乃乃 以蘇
夏乃乃世やいつれのまにふれん 乃
川流や流とやまあゝあゝの南 猿雄
身乃乃雨あゝやまのまのまゝに 園指

啼ひや振のるはよあうまき 車来
茨さゝも笑りよあのも鬼あゝこ 荒雀
せよりこゝろひはあゝあゝあゝ 馬寛
臨まゝれまは乃切目や露の塔 拙候
好こゝろひは形まはされま大根 乃龍
早蕨やまゝこゝろ山乃 ねうり 正秀
こゝろひを乃 母のひま肥るこゝろ 夕可
日乃新ま猫乃 捕ちた獨活芽外 一桐
蒲公英やまゝまゝにまゝに花さる 圃落
猫魚 附胡蝶
赤い魚や肉まはは啼猫乃 慈 撰丸
うまあゝまゝにまゝに猫乃 泣血喰 支考

おもいひはるけり世猫ニ 巳百

白回ふつや

やまゆりも翅を動かす胡蝶ハ 柳梅

衣をさしのさすや雪の蝶乃相 惟然

蝶の舞おつる桂よりうらやま 園指

風吹りし舞の出まはる小蝶ハ 雪雲

雪雲ハ 花よりうらやま胡蝶ハ

春鹿

振むくしゆや鹿世乃鹿の角 以維

春耕

妙福乃あはるあてささる麻 木苗

苗れやあはるあてささる麻 以維

千川乃田沼かつらあり新波人 一説

桃附椿

白桃やまのりくもさしひあのみ 桃隣

令相らよの盛あり桃乃花 介花

伏見の心さす糸種乃上の鹿の花 雪芝

梅さぬは津とともさす鹿の花 其角

花さす小桃や高の舞妓乃服躍 其角

江東乃生由ら鹿乃懐旧乃法と云

これく経文堂の平一白の法門と云

小服綿より先とやとせ玉つをき 角上

穂ら枯くまをさ花咲桂乃那 弥香

丸あけくまや桂乃あとの穴 洞木

ちり枝ありかうり續くは
世故

歎き 附 踏踏衣

山吹や垣下干しは 蓑一
園指

田家の人子射しよ

山吹も散るる 糸は 鱒なまは
酒堂

橋おこしの 橋の 橋や 強の
雪芝

菽腫や 穂夢よ かく 花の
荊口

真月

山乃 端と ちり 魚し 妻入 月
雪町

妻雨 附 妻雪蛙

およのき 子のみ たりや 妻乃 雨
荊口

此は 網子 合りり 妻乃 雨
乃 花

妻雨や 唐の ある 妻と
遊刀

ちりりーるる 衣の 旅店と ぬねる時

妻雨や 乾らるる 妻
妻考

妻雨や 光るる 妻
桃考

洗雪や 雨に 追ふる 妻
風麦

此は 妻や 味乃 結る 妻
風睡

沙十

乃ちり 帆乃 浅海と 妻
妻果

平川に 富ま 此 新の 交 沙十 代
園指

執事

出かりや あまれ 初る 妻
許六

若科およの 越る 網乃 苗
風睡

をの事やよく仕てゐるを酒法 風勝

を年孫とあけけり

えりやあしはなりの事乃花 猿雖

子たまたあ山 惣然や花のこま 葛草

背まをくあおあをんをや花の云 形意

遠深乃をうにんを色を屋は鯛のり 耕者

鮭乃筆賣のこまを氣とれく初見外 左折

をの事や年を君殺乃のは立元 右川

世乃業や世乃殺乃の如くは 斜炭

濡りやちかきけの初日初 山崎

えりやあをくまき猫乃み器 任乃

竹下

我やをううに鏡ををる子りり 之集

播粟や餅こやまをれらのもあや 信圃

中よりこの子似たりをさのま 圃角

夏之部

郭公

曉乃雷とこまかちやま 其角

ほくまきま常如湖あ乃ま 六州

あし陰や何とまけまをま 君良

蜀魄のあを敷白く朝能の山 支考

鳴瀝乃名まやまけまをま 如老

燕乃吾あしをまやけまをま 芦舟

従うりもむ田子あけ、子視

山白く石山の林帯を順礼のつと通る
事かきんのはねや中、ヤウリ 法圃

木附草花

橙や日のくもれさるるまふま 園指

里(乃)海うりぬまあふり 世教

園中 二句

叶中乃古もまいつれ枝乃花 此節

手切乃きまも掃乃まふま 千川

娘百合や上よりさか休舞の糸 素読

題山家くる会

あつちやうきと波るふ合花 支考

山あふりのねくもや杜ま 尾尾

冷けきあつちやうきと波るふ合花 法圃

手のとくお水あふり花つと 此節

なと菊やまふ子の春はまふく 世教

くまの産るる身

まふちやうきと波るふ合花 法圃

夕のあや裸くおまきと夜まふ 芭蕉

と漂の花とらふまふまふ入は 芭蕉

蘭乃花にふりく水濁り水 此節

蓮乃葉あやんかあまふり花 芭蕉

空あまふり蓮の蠅おまふ 芭蕉

瓜

朝の涼よよまじりてく涼の瓜の土

芭蕉

娘のくちや神子入くもまきうら

至晴

あらん

藤おあゝ後々出まけぬ牡丹

風伝

了の苗

京入やるとおの田植のゆき中

卯七

早とせよ後んやまじりての細

園接

畑とせよ方の林あけれま早苗

魚日

一田つてけりりりてやあゝる

少枝

里の子々燕握るまの苗う那

ち考

堂

朝も火の烟りてあゝる

許六

と日月にま乃堂を噴まらり

世秋

納涼

涼しや竹握りて萩の心

半残

マ草花や度々まむふ夕

惟然

海川の蒼き名

そを涼よや風あまうりて涼

史邦

涼しややわらぬとわくの運

世年

る娘や裏つ咽りて夕す

る手

涼しやと牛乃屋橋く川の仲

漫筆三句

腰ひきく仲子涼一さ清子の舟
涼一さや掾より足はゆるさく
中群を知らぬくあつる涼の舟

西堂
支考
喜世

原風も出舟一さ燈のこりれ舟
ゆとり一さ中をのりく涼の舟
さゆりく人さあきれく涼の舟

游刀
全
玄舟

黙然子一さ涼也石乃上
職人乃帷子きく舟夕長く
涼一さや一さ舟織乃風も舟
西原やむく人乃く色も月乃舟

正秀
土芳
我眉
里圃

東之夏

ついでとや飛つりついでに夏の隅
事願ふ人世乃くく夏の暑く

世菘
百手

菘医志乃くせりれは答はつる
室乃く清く赤冷乃暑く

正秀

丸道乃内乃あつりや梅舟
煤さく田蓋のつり一さ舟

乙州
怒風

茨のよ垣も志はるぬる舟
星乃くや暑く月乃く舟

我峯
下若

あつた日や扇をさく舟
積あけく暑く舟

泉宮
百手

粘る舟熱く舟乃く舟
之あれく舟乃く舟

依圃

井乃子

苟とぬらきなる崩り舟

可波

夕竹や烟乃いつる庫裏に窓

曲草

乙乃雨 雨夕立

あゝ雪やまなくもなほに燻乃中

不玉

さゝしんや 寝惚ふ草乃 烟

芭蕉

乙乃雨や 踵よこぬぬ張つて衣

沾圃

夕之よこし 合々り 日傘

杜候

乙乃雨や 蓮乃 羨ふこく 注乃 芦

苔菴

夕らや ちしし けしむ竹乃 皮

曉鳥

乙乃之 上 傘る 家や まく 町

圃水

蝉

乙乃雨や 中 房り け 寝乃 寝

正秀

まの と ぬらき 寝と ぬらき 寝の 寝

相故

出乃 乃 寝涼し ま 寝乃 や ぬらき 寝

乙州

寝乃 や ぬらきの 寝る 家の ぬらき 寝

曉鳥

うらを

乙乃 乃 目や ぬらき ぬらき ぬらき ぬらき

系拾

新文

乙乃 乃 冷乃 乃 菜乃 乃 菜乃 乃 菜乃 乃 菜乃

松風

乙乃 乃 冷乃 乃 菜乃 乃 菜乃 乃 菜乃 乃 菜乃

荆口

乙乃 乃 冷乃 乃 菜乃 乃 菜乃 乃 菜乃 乃 菜乃

如真

川 持よいて

乙乃 乃 冷乃 乃 菜乃 乃 菜乃 乃 菜乃 乃 菜乃

文鳥

光の芳らとさる乃月十日て正
明月よから水し星れちり水し

山月乃山甲あると山月れをさる

まろく

二んまろく産産もつぬる月之次
芥子存と畑まろくの人月之次
柿のふれはふ助たま月之次
山をけちつとも月ぬや掌の月
名月や甲乃まろく乃まろく宗
場に存り月之次まろくや遠枝
明もや影の月之次乃女中乃
破もや何のひらりぬの道

飛入乃客ももさるの月之次 正秀

山川乃乃れりまろくとまろくと

舟乃乃れりまろくと月之次
清音乃乃れりまろくと月之次

家乃乃れりまろくとまろくと

舟乃乃れりまろくとまろくと

姨捨と園のちるや月之次
馬鹿おまろくと月之次
考ろくと月之次
月之次海乃まろくと月之次
川上乃乃川乃まろくと月之次

山川の末乃まろくとまろくと

正秀 丈子 宗柳 沾圃 馬鹿 里東 牧童 甚哉

十のあらしのうらに園乃初小 全
ゆきよみは園のちもちりしつゝの花 猿雖

セウ

まじりやあ田れよおあ句の河 唯然
早も金沢んあましし河れおるは 原系
舟形、のせもとりくやわりの知 赤池
もあましといふる井はあましき 沼圃
お風て雲姫乃 園ちり 乙州

立秋

雲ぬ、やをよ片うほを秋の秋 彦川
秋のりや中よ吹きこせは雲 左次

緒子

おきあ乃花遠由は枯枝引 柳枝
細工あまらうの枯枝乃つわさ 徳曼
あまらぬぬめ馬骨乃要うね 清子
をさふ一― 枯枝の枝よまら家 了菟
一節ハ花地まらう― 州道 鳥粟
り園とらほあ少や 有 支派

緒芭蕉菴

百合ハる美芙蓉と清く今下ふ 以夏
はよ娘乃なまやも席しほまの花 史邦
枯のりもまらおう―也露は花 万平
露のりや房の―あふ時なはあ― 芭蕉
露のりもまらあめ日較は 全曉

秋之聲也二番たぐこの秋とて時
雀子乃鷺もよむや秋乃風
何ふりしとつらうー秋乃風
松乃まじや柳乃よし似秋乃雪
そのつらうさす乃を母をハ
ぬんともや母をよむよら愛
あれしとまはつらむら丸
猿雄

編妻

ひらわくさむとせし編乃後
編妻やせよぬとせし編乃上
明乃のや編乃白鹿乃端
いねくもや園乃るけむ位の雪
一東
宇氏
土芳
芭蕉

本安 附南

園栗乃るるくおぬりるをの
炭焼に造柿たの心候く物
秋乃のや目わらうの柿のしん
はゆくも常とあり枝く代
この草や松もははら一さう
何空乃少中ふ何豊乃

五音紙

松葉色もあふれ山乃
晴

秋乃

まの草やさうのむらさき
晴

楓

清風乃掃落葉吹送う村のま

小観

糸

庭にあらぬ糸の乃を座や風の音

凡能

もよほすに糸の乃を吹送う村のま

一由

豊後

起る人々送る人々送る人々送る

車者

亦乃とては物もむいふ種をうか

買山

さゆいしるるるるるるるるるる

めま

いぢり乃斗從上心家とていふ

昔葉

昔葉のいふいふいふいふいふいふ

乃松

早稲刈とてはうすうすや小の母

乃松

山花乃少とていふに啼きお乃種

斗松

飛り上るに何ぞ遊ゆ小葉白田

支考

一とわ乃をや芋乃をいふとていふ

全

那とていふ始とていふ一とていふ

惟然

而乃りていふとていふとていふ

西考

とていふとていふとていふとていふ

西考

孫とていふ

その乃もや西瓜上へ乃花乃種

沾園

菊

公孫樹二る十日も恙な

葛辛

あらしの子やわらわら茶乃玉牡丹

濁子

煮上小錦乃を茶にさす一菊乃花

支考

歌三首

可きつをまよせかゝる山路乃葉乃葉
五峯
借るふけし一層の鳴かり小乃葉
式葉

暮秋

度江や背負う少くゆゑ秋乃葉
此秋
以秋瓜鼓ら乃赤乃恨り形
乙州
以秋やまばいづけさる葉のいゝ
芭蕉

雜秋

みよ平一海とほわや〜と鮫一
之り
葉のくれ山家傳てね乃中
圃友
あ〜るるれ種と道はくねる
睡止
殊る物やあれ時を秋乃雨
以反

力あつはにま乃そり〜鞠の形
菘子

そり葉や稲く〜家乃笑聲
乃平

柿乃まよに焼〜感ずん存者
葉乃
宗波

かろそ馬ふ〜巖者よの田鼓

とくゆへ〜能るるまを画く舞臺

の響よ〜けりりちとん生る乃

まらふれり〜いのみあそひと舞

か〜んやか乃鶴鶴と枯〜

修〜まろ〜う〜こ〜わ〜い〜はら〜せ〜品〜いの

せらととら〜ら〜いのし

稲つゆや〜ち乃〜さ〜る〜
乃乃穂

冬之節

時多 雨多

このは乃経乃孫目やと山時雨
志く水もそ又折風乃只を以
り小とる人七年より初時雨
一時雨止りて山とそる山
初しこれ小瀉乃芋乃煮の穢
平押さふ及田らるる時雨、非
山賣也いり志く水乃幾廻り
松賣七も上さず乃初時雨
穴無乃もとる川は時雨
あつ水や流るる川は

世彼
少我
昔焦
病法
馬寛
世烟
馬指
空牙
力有
新口

ふよとそく、高がとめくは時雨、形
柿白む日おもにーや即、時雨
いこより志く水く里、味時

形我
海川
聖圖

沖西乃節、川くち、時雨、水
志く水や大乃おかく川乃流
飛とり、水あお一、水く、時雨の末

小鯉
支考

元禄辛酉之初、九百素堂
菊園く遊
字偏乃宴を社、凡乃くお、
作らま、このは、水く、水く、

やうに菊をひく時別をゆ
いつ休たき呂よりうの展言局
の多かりしなまはしあはるを
秋の菊と評し人ごとすれ
るるまはなりぬ

其角
桃凌
法園
香花
了菟

ちわい菊も臨りちわい人
そり遠はりしあはる一々
とあまひしものつうかると
とらふ家もまはりてはか
うけしおはははと人見竹
素更いと送し水よりそと
うきと物ありあはる
あきは聴きあはる風を
て月をわらぬ

幸堂
曲書

氷似や練癖より日乃遠石

幸 附木

水鏡法くもや茶から乃水他花
非我

山家茶茶乃頌こおま

一茶花より用く冷り死
車庸
土才
山家茶茶乃頌こおま

切かひかー本乃茶らる水也星の故
法徒
嘉法
惟然

三十二

茶葉より是のりより本乃茶茶

中柳坊茶茶乃度とら茶

茶のりより先茶のりより茶茶

一七

茶のりより先茶のりより茶茶

桃醉

茶のりより先茶のりより茶茶

利牛

茶のりより先茶のりより茶茶

支考

茶のりより先茶のりより茶茶

皆月

茶のりより先茶のりより茶茶

風行

茶のりより先茶のりより茶茶

惟然

茶のりより先茶のりより茶茶

塵生

煤くすやあし白くす
 方見え不隣乃乃明や
 煤掻やおま一粒踏く
 餅つきやちんか
 餅作りやあま
 ちり搦乃
 此は返る乃
 門砂やあま
 草ふや
 猪めよのりり

其遠
 了竟
 同如
 惟然
 盆水
 炭草
 馬俣
 草土
 車来

大平や教子
 袴さあ
 打こ
 川結
 桶の端乃
 天熊毛乃
 信菰子乃
 白を圖
 のり
 のり
 我

了平
 草由
 正秀
 菰子
 棟雄
 惟然

笠子よきしつておはあり年のふ
余ふ神くしんらのあまの年ふ
街く所おもゆる年のゆ
高きもや弱りてゆる敷の中
高きもやの指子ぬめん明を式
我阿のハ末の子かつまぬ死
一とまきと啼く静くし海歌の終

新文

小屏風よ葉を揺るる言ふは
梅竹よゆれんは正し一々の端
井乃乃あのおいこいある言ふは
之もや山伏村の長ははるる

昔暮
文考
土著
尚白
桃後
山蜂
利合

斜敷
土著
葉下
仙杖

重なるらきものあけやち就
火焼うり癒すのけしや癒すれ
山陰や猿、鹿、狐くある向
廻教上人参の根ゆきしり小
高あ川やあまよく新のまよ水
秋教之部

厚葉

厚葉もあまよまきりか厚葉も
秋くしん余や敷子合に遊程の者
山寺や猫守り子あれん像
多負福のちし休もや厚葉像

灌佛

圃仙
多葉
二谷
法園
秋風
山蜂

法園
芭蕉
石撒
山蜂

薩仙や作しあつて開戸の文
敷きや併にまわく二之の
催伴や秋遊と控はあはれあり
之を

意奈

赤らりしものかこしやうき運まうり
や海伏や坊にやうきまうり
此年
比國

甲戌の女は清き侍とよみか
冷くくも盆會といふ心と
昔
芭蕉

情少年二句

うちの戸や麻呂の筆かぬ形
この歌とまうりぬのまは秋の風
支考
惟然

るの産は穉妻のすけりの村
まうりや穉妻とては挿乃ぬ
支考
由吉

村も掃もおるぬまうりは秋湯
腫ハ
佐圃

腸ときらりしんぬくぬまけ
何のま水かのま水ふは原湯
許六
水切

雑題
俗美のま如堂

阿修の時

涼しくも世山はえつ存る併に
わさし子まきし二本さしうわん
く細やらうるるうて併に世
よのうま川越向あや富士あて
手あさしに魚のる原しえ念併
今ん学ん本崔啼あり夕まら
旅し部

送別

え福七年の女をまはるの別を
妻ぬるに餅をのとの別う那
別うや掃冷いにかうねの上
惟然

許さるあまのあむく時
旅人の古くも何と推乃ん
留別

俗乃惟然

流るるあまの草とふか
鮎の子のまら魚はる別う那
甲斐のうのあまの

定めの心

年よりして牛のうりうり
編う白やうま世はるる
まへもあまのうまの
あまの國にあまの

三月

初月

乙卯

本妻

地坡

又考

高号

惟然

草妻

大竹

草妻

中妻

越人

中妻

うはくは谷地なりしし小坂
十圍子も小坂ありぬ秋の風
大名は侍らちも御しりあるは
全

くぬ母路

くたしはも茶うそくみぬ金の籠
ほくくハ土て家あつるあそふ海北
咽ふのそもらるぬくし移す
史邦

四圍のふりし樹く作の家のふり

文を乃庵ひりり秋涼
我藩園りり丸松のそくつね
史邦

常陸のほりあふふらふふ

て下をボんそそいりのあふふら
あふふら名とそそいりぬ二取村
乃秋の下あふふら

振るも情や樹に小豆 樹
全 支考

えねえ年のいき葉はの竹葉
武らふちむくしき海田の
全

糸あふふらふらふの
一くれん

576

Handwritten text in a cursive script, possibly a list or account, enclosed in a rectangular border. The text is written in dark ink on aged paper.

Handwritten characters or a small note at the bottom of the page, possibly indicating a page number or a specific reference.

Handwritten text in a cursive script, possibly a list or account, enclosed in a rectangular border. The text is written in dark ink on aged paper.

577

炭俵序

けき紙摺の孤を世破利半らふ常々甚て甚乃新より
くしん瓦乃家といひま心乃衆とくまうして十の九の
乃文字の野風とくひのまの事也まおのりたのり
よをも成よの二三子座の侍て火輪より一炭と云ふ
著るこゆるは河原の宿のまの事也まおのりたのり
あふんとまのまの事也まおのりたのりたのり
まの事也まおのりたのりたのりたのり
いつのまのまの事也まおのりたのりたのり
まの事也まおのりたのりたのりたのり
乃つとまの事也まおのりたのりたのり
篇あつてまの事也まおのりたのりたのり

まひまみまの事也まおのりたのりたのり
くまの事也まおのりたのりたのり
ハ詩乃まの事也まおのりたのりたのり
まの事也まおのりたのりたのり
ありつとまの事也まおのりたのりたのり
うまの事也まおのりたのりたのり
まの事也まおのりたのりたのり
炭乃まの事也まおのりたのりたのり
ハ課也まの事也まおのりたのりたのり
うまの事也まおのりたのりたのり
序まの事也まおのりたのりたのり
まの事也まおのりたのりたのり

うしとちちとほくじ

え福七の年夏同らき初三乃日未終書

むめくはのつし四乃出る山沙成

まよしに辨子乃啼しし

家もまほくとまのてしきしう終

上乃もまらにあうるま乃止

雪乃四もしくしきしこの空

義越しあひあま乃さし

おほくもあしきくわいわんさ

指とほくし人すあはあめ

世書

世書

全

世書

全

世書

世書

世書

又二

あまらうまひかかーつての細基

こしし雨乃あめぬ六日月

ひけしちみりしきしやう向河者

甲しししひ出のせ代乃事

新乃片乃持取とまらうの

こんはや九をりしきし名月

多のしよま掛し比あしん

家はあしきし居合ひしあよ

甲しし乃はらしし砂てまらし

門と押縁し壬き乃金保

あ風しにまき乃しよれと吹まほ

まやまらまらに脱つるらめ

世書

世書

世書

世書

世書

世書

世書

世書

世書

世書

世書

世書

名

江戸乃ちあそびつれなきとて
 こ地にもつれなきとて
 ぶくしにすれ乃ちあそびつれ
 桐の本言く月さゆるし
 門あけてあそびつれあそびつれ
 いらよしあそびつれあそびつれ
 かつ年よあそびつれあそびつれ
 又このころあそびつれあそびつれ
 江戸乃ちあそびつれあそびつれ
 あそびつれあそびつれあそびつれ
 そのあそびつれあそびつれあそびつれ
 魚乃ちあそびつれあそびつれ

世後
 世後
 世後
 世後
 世後
 世後
 世後
 世後
 世後
 世後
 世後
 世後

又三

ちとちとあそびつれあそびつれ
 未とちとあそびつれあそびつれ
 隣へあそびつれあそびつれ
 屏風乃ちあそびつれあそびつれ

世後
 世後
 世後
 世後

三吟

兼好もあそびつれあそびつれ
 ちとちとあそびつれあそびつれ
 片もあそびつれあそびつれ
 舟もあそびつれあそびつれ
 細くもあそびつれあそびつれ
 子編もあそびつれあそびつれ

世後
 世後
 世後
 世後
 世後
 世後

子も裸父らて水く平苗毎
岩のいもらのま白く
面ありり階軒まの号出て
さ方町よりむし西より
竿竹にまき乃伸まき
る、歌水くわく人あ
言乃月ナま乃あけわは
揮まのし、禮ちるし
ちうすれオてすり物いほあ
坊うにありしやう仁平八
初級や夫川へそりわう編
鳴る勝七つし園乃東

初年
世波
孤至
初年
世波
孤至
初年
世波
孤至
初年
世波
孤至

十二之舟乃らま乃ちら
平堂仕しゆまけしう
日乃五乃方とあし竹乃毛
只奇籠らる口すくあ
近し路乃るを酒をす初て
天と氣乃相上之り乃乃
此乃るまにわは正の二
録乃実まの至根をし
平乃ま乃高り連まきあり
西於然こる乃人まきつ
ほらくしとまき乃のひま
ほらくしとまき乃のひま

初年
世波
孤至
初年
世波
孤至
初年
世波
孤至
初年
世波
孤至

城もきぬ銀路を乃を乃香道
門道夢の可乃 相流 孤至
彼岸已一き乃花乃咲き
之人なき 抄 乃まきら 抄

春之部 葎句

之夾

蓮華のついで也 何れ乃初便 芭蕉
東中やまのついで声乃初便 獨子
みらのく乃のついで人乃満考 抄
まや後乃丹波乃のついで 未
乃乃のついで乃のついで 抄

いそぐー 未まきと花乃かきを乃 大坂 無堂
管つて也 未まきれはあひの初和 徳水
初いそぐ門鏡坊乃れ初初乃 治圓
初乃初初初乃 河也 孤至
初乃初初初乃 利牛
初乃初初初乃 世波

梅

梅一本ついでし 乃れ染うな 彦彦
むく咲也 向乃梅本まよきまき 曲歌
むくま乃乃筋に まらうらまの氣 支考
客乃うらとんこまき
むららうや系まえれ日乃白人 云芳

枝のく漏るる乃の歯をばとけり
 赤みり乃の涙肉よりむらるは
 みるく平の笑うる子と物乃花
 紅手毎に娘とまはるまき戸の柳
 かのこころ乃ちくまのまのり
 とももつるも都の白つる草花
 七もあや遊む志うけて切刻
 うらむ心小く若草摘む上腰
 枝のく漏るる乃の歯をばとけり
 赤みり乃の涙肉よりむらるは
 みるく平の笑うる子と物乃花
 紅手毎に娘とまはるまき戸の柳
 かのこころ乃ちくまのまのり
 とももつるも都の白つる草花
 七もあや遊む志うけて切刻
 うらむ心小く若草摘む上腰

利牛一
 滋刀
 世彼
 枝風
 其角
 世彼
 仙杖

三十二

源川乃云々

ちのあやもまき乃の独りも云々一
 十五のまきも瞳乃乃古もまき
 猫乃のまき初もつる
 ぬこの子乃のくつはる水つ湖
 うらむ心小く若草摘む上腰
 とももつるも都の白つる草花
 七もあや遊む志うけて切刻
 うらむ心小く若草摘む上腰
 とももつるも都の白つる草花

柳

利牛一
 滋刀
 世彼
 枝風
 其角
 世彼
 仙杖

休つちの今打こむ少あゆみ
まきぬや燈の茶つたぬぬぬの湯
夏あつてのの草や二つふり
ほうくくとこふ焼門乃つとふ
き乃切やけ乃く腰や風乃茶
ふとのふきしとふ茶乃ま乃風系

乃有
芭蕉
子冊
忍沈
松枝
仙華

泣交陽を垣より内はすまは

松枝

はれあしをいし羊あは孤を詠ま
中らうらうらぬお川をくみ送る

世故

ゆきまゝのこまけ切もおまじゆ
あまのめくく好い月をうらうら別れ

和牛

又十五

夏部之装句

青夏

帰るを乃裏の夜月しあふく
衣之十日をやくハふあうり
綿とぬく様ぬハセリ一衣更
巻ちうすの手に姿やゑうハ
ふ乃ぬはさくうはくくのあふ
扇を乃暖兼白一衣ハ
う乃茶
弁を茶やうき柳の及ぶ
う乃を乃絶らたうの園の門

嵐亭
群枝
九節
雪芝
子冊
訓牛
芭蕉
き林

旅り

浦見や印くる博のそが小舟く 盛水

端午

あらしの雨や傘ふける小人形 其角

さしぬき物くみく平はつまじ風の毛 酒屋

より進めしうら、あやあやふ外 桃傍

又もろく及上もろく一線五托 先客

夕と乃やま着乃骨に甲を巻 仙代

物よかりとくいのきあふ拾ふ糸 妻持

夏詣

並和紙みうくく町のあつさくふ 臥る

栞余よりのまはにあつし是れまの 斜鑽

二ふゆ終いひくくあつさくふ 豊岡

くけ山乃力乃くぬあつさくふ 糞餅

のうら詩田よりの候り

五月雨

あらしの雨や傘ふける一割る丸市橋 素地

あらしの雨や傘ふける川大和州 桃傍

あらしの雨や傘ふける小舟とに手くま 那波

あらしの雨や傘ふけるあいのまのちる高薩 炭炭

このうら秋詣りまのうら

五月雨や顔もふくまのうら 盛水

涼

川中への根をぬくころが涼ふ 芭蕉

七ク

昔のこゝ松林をやはらぐ
早倉千代丸えんえのやちの松

其角
爪を
瓦を

十車寺の松

とくすのりくまう一軒せむき
涌くささりくまの松乃月
蓋乃月ぬいこ門とてささり

西堂
松由
井坂

田園

田園

湖島やまの松林の門の松
ちんちん口傳出の松の松

王墓
利倉

又
二十

トくすのりくまう一軒せむき

松林

秋中

手よしの松林の松乃月

松乃月

松乃月人の松乃月

松乃月

松乃月平らんで松乃月

松乃月

松乃月や著て松乃月

松乃月

松乃月

松乃月の松乃月

松乃月

松乃月の松乃月

松乃月の松乃月

松乃月

松乃月の松乃月

松乃月の松乃月

松乃月

草子花

多海井乃 荻や ちり秋の花 柳流

花すきことしへちうや村すき先 野香

片足乃 荻や 刈りし猪の尾 荻流

芦乃 井乃 虫拾 揚るまきこり 文州

少つしはきり

芦乃 ちり 若うし 一こち荻の猪 三斗

山中の草花とて

草花や 鼻のまにちりきりるこ 喜南

園菊

菊畑に くるあるまにれりりり 秋風

秋風も ちりちり 出ぬおろり 柳流

又 古一

秋花也

花のちり ちりちり ちりちり 柳手

ちりちり ちりちり ちりちり 秋風

秋風や 荻乃 柳乃 ちりちり 秋風

荻乃 ちり ちりちり ちりちり 柳手

ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり

ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり

ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり

ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり

ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり

ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり

ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり

草花のや 其の草花し 思ふは 枝の 一 糸
夕鳥乃 けいハ 秋一 何處の 一 糸
くま 秋ハ 風さうり する 風さうり 秋
秋 風ハ 涼や あり 糸 糸 糸
春一 乃 序 他く 一 月乃 雲 雲
冬之 部

初め

風や 沖 上 下 心 心 心 心 心
糸 中 中 中 中 中 中 中 中
糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸
糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸
糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸
糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸

又 糸 糸

刈 為 妻 此 乃 糸 糸 糸 糸
糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸
糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸
糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸

糸 糸 糸 糸

糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸
糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸
糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸
糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸

時雨

糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸
糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸
糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸
糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸 糸

糸 糸

其の初めは水はくわくわく水は卵 野六

野六のころ

水は流るる水はくわくわく水は卵 野六

大根川とくわくわくと

水は流るる水はくわくわく水は卵 野六

水は流るる水はくわくわく水は卵 野六

水は流るる水はくわくわく水は卵 野六

水は流るる水はくわくわくと

水は流るる水はくわくわく水は卵 野六

水は流るる水はくわくわく水は卵 野六

水は流るる水はくわくわく水は卵 野六

又 水

水は流るる水はくわくわく水は卵 野六

水は流るる水はくわくわくと

雪

水は流るる水はくわくわく水は卵 野六

水は流るる水はくわくわく水は卵 野六

水は流るる水はくわくわくと

初のうれき然し 水の流
まれば流も依りて 川の流
うつるもやし 人のまじり
屋敷の北 橋明のさくら 喜吹の舟
海山は 舟のまじり 舟のまじり
舟のまじり 舟のまじり 舟のまじり

題詞

あつまつま 舟のまじり 舟のまじり
舟のまじり 舟のまじり 舟のまじり
舟のまじり 舟のまじり 舟のまじり
舟のまじり 舟のまじり 舟のまじり
舟のまじり 舟のまじり 舟のまじり

櫛のうれき ありつまつま 舟のまじり
庚申や 舟のまじり 舟のまじり
舟のまじり 舟のまじり 舟のまじり
舟のまじり 舟のまじり 舟のまじり

舟のまじり 舟のまじり 舟のまじり
舟のまじり 舟のまじり 舟のまじり
舟のまじり 舟のまじり 舟のまじり
舟のまじり 舟のまじり 舟のまじり

歳暮

舟のまじり 舟のまじり 舟のまじり

松のふまき年一 月うくし
 卯のうき老の川一乃あくくく
 辛のうき山く又ササの分うは
 よいや一いあまうとまて
 ちや一一人くあくあく南
 惟子一府一うらわあまう
 云あらあつ別一あま一合入
 施あや一い合も一あつ別
 孫はあま一くく一あつ別
 ちや一うき一あつ別
 先沖別あま一くく一あつ別
 内一くく一あつ別

利牛
 磯部
 世波
 利牛
 世波
 利牛
 世波
 利牛
 世波
 利牛
 世波

ちや一うき一あつ別
 松のふまき年一 月うくし
 卯のうき老の川一乃あくくく
 辛のうき山く又ササの分うは
 よいや一いあまうとまて
 ちや一一人くあくあく南
 惟子一府一うらわあまう
 云あらあつ別一あま一合入
 施あや一い合も一あつ別
 孫はあま一くく一あつ別
 ちや一うき一あつ別
 先沖別あま一くく一あつ別
 内一くく一あつ別

利牛
 磯部
 世波
 利牛
 世波
 利牛
 世波
 利牛
 世波
 利牛
 世波

乃其まれよしあ利とかりまぢぢぢも
うらほしーぢぢぢぢぢーけらうつぢぢ
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
あのかはまもぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
とーぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
大勝殿まゝいぢぢぢ
安んぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
長有のぢぢ

木公名

安永三年甲午冬十一月吉日

東都書肆

皇都書肆

- 山崎 金兵衛
- 富田 新兵衛
- 西村市郎右衛門
- 野田治兵衛
- 井筒庄兵衛

